

きらめき



平成19年9月15日
第14号

各施設ホームページには、法人ホームページからアクセスしてください。

<http://www.k3.dion.ne.jp/~hakukou/>

各施設のホームページにメールボックスがあります。ご意見、ご感想をお寄せください。

社会福祉法人 薄光会 広報委員会発行

本部、豊岡光生園：〒299-1742	千葉県富津市豊岡 3535-1
三 芳 光 陽 園：〒294-0825	千葉県南房総市上堀 280
鴨川ひかり学園：〒299-2854	千葉県鴨川市代 1297
湊 ひ か り 学 園：〒299-1607	千葉県富津市湊 934-18
ケアホームCOCO：〒299-1616	千葉県富津市海良 92

TEL 0439-68-1711
0470-36-3211
04-7099-3311
0439-70-6551~2
0439-67-3380

「デイサービス事業、

順調なわ〜」

デイサービス事業が軌道に乗ってきた。

昨年度は、制度改正もあり、前年度の実績から「小規模事業所（前年実績が月平均三百人以上）」ということでスタートしたが、報酬単価が割高ということでの利用控えもあり、定員二〇名で利用率が五〇%をやっと超えた程度であった。

今年度は、施設の改修工事も終わり、リニューアルしたデイサービスセンターで、「きらめきの湯」と銘打った温泉入浴を売り出し、事業規模も「通常規模（前年実績が月平均三百人以上）」ということでの報酬単価を抑え、事業展開を図ったのである。

効果は四月早々から見えだし、四月の延べ利用者は、定員を二〇名にしてから初めて三〇〇人を超えた。現在では月の平均利用率も六十五%を超え、利用予定表には定員いっぱいの日がちらほら見えだし、最高十九名利用という報告も上がってきている。この調子で行ってくれば、さらに運営が厳しくなってくるのが予想される特養の収入を十分にカバーできるものと期待が持てる。相談員は送迎の車両とドライバの手配に嬉しい悲鳴を上げているが、この状況が、いつまでも続いて欲しいと願うばかりである。

本当は手放しに喜びたいところであるが、自分は、そこはかない疑問が頭をもたげてくるのを禁じ得ないでいる。

介護サービスの利用は、誰のニーズにより選択されているのだろうか？利用者本人のニーズにより選択されなければならないはずだが、実際はどうなのだろうか。デイサービス事業の利用率が上がった要因として職員の日々の努力や温泉の効力を第一に挙げたいと思うが、利用料が下がったとたんに利用率が上がるという現実を見てしまうと、利用者以外のニーズによりサービスの選択や、利用頻度が決められているという介護保険制度自体の矛盾にぶつかり、自分の無力さを考えてしまうと、溜息が洩れてしまう。

コムスン問題等があって、制度自体の見直しが前倒しで行われるという話が聞こえてきている。その場しのぎの改正で終わらず、制度自体の根本からの見直しを願わずにはいられない。

声を大きくして言いたい。

「介護保険は、いったい誰のための制度ですか？」

いけない、また最後に嘆いてしまった。

施設長 神谷 亨



社会福祉法人薄光会後援会より、法人に寄付をいただきました。失礼とは存じますが、紙面を借りまして御芳名の披露と御礼を申し上げます。

社会福祉法人 薄光会

理事長 山崎 幸男

小野 晴子様	小澤 はつ様	中村 光雄様
鈴木 忠徳様	山田 しげ様	高橋 一利様
斧 寿子様	金箱三恵子様	金箱 弘様
唐鎌千代子様	西川 敏幸様	仲川 重男様
太田和光子様	後藤 順司様	久保 光枝様
関 典子様	菅原 敏様	岡田知恵子様
鈴木喜代子様	熊谷 英司様	小滝とし子様
小川原春江様	白川 和男様	椎名 正昭様
鈴木 正吾様	鈴木由利子様	森 知子様
加藤 知光様	加藤富士夫様	加藤 洋一様
斎藤 進様	山崎 幸男様	駒崎 和男様
廣田 俊介様	木村 秀男様	山崎 照海様
香月 弘光様	澤本 義則様	小柴恵美子様
小柴 勲様	浜田 幸一様	沖村 清江様
神谷 良三様	岡田 和夫様	佐野 様

（平成十九年九月三日現在）

学園新聞

ひかり

「夏の思い出」

「今日は、みんなでスイカ割りしよう!」

「えっ、スイカ割り? やるやる!」

職員の声にまっ先に反応して、外へ出て来たカズキくん。

仕切り屋カズキくんは腰に手を当て…

「最初はナオちゃん。先生、飛び散るといけないから、スイカにビニールかけて!」

「違う! 違う! そっちじゃないってば!」

足を大きく広げ、まさに仁王立ちのカズキくん。完全に場を仕切られ、圧倒された職員は一步、二歩と後ずさりして… スイカ割りはカズキくんの独断場。



「あたしだって、えい!」

再度挑戦のナオちゃんが渾身の力を込めて、バットを振り下ろします。

「バキッ!」

割れた! 割れた! スイカが割れた!

真っ赤に熟れたおいしそうなスイカ。カズキくん、みんなで分けて食べよう! カズキくん… ああっ!

「お先に味見するね!

うまい、うまい…」

「カズキくん、ズルい!」

トモくんのうらやましげな視線も気にせず、スイカを頬張るカズキくんでした!

(碓井)

「野菜満載!」



「今日の献立は… 農園で採れた野菜は…」

昼食前、食堂の掲示板を見ながら、職員が皆に伝えます。夏を迎え、ひかり農園産の野菜が食卓に上がる頻度も、種類も増えてきました。



「自分達で育てた野菜を自分達で味わう」農園を作って四年が経ち、この形は利用者の皆さんの中にも浸透されてきています。

ちなみに今日の献立はというと、生姜焼き、ポテトサラダ、ごはん、味噌汁、スイカ。

おいしそう!

シリーズ 『やさえる』

ぼーちゃん

①



智さんは、鴨川ひかり学園から豊岡光生園に移ってきて以来「ぼーちゃん」と渾名がついた。宮崎駿監督の映画に出て来る登場人物である。雰囲気似ているのと強い意志の持主であることからついたらしい。「智さんは?」「ぼーちゃんならあそこ」「智さん、あのねえ・・・」なんて、やっている。

智さんは、去年の七月半ばに豊岡光生園に住むようになって一年一ヵ月、人生の一つの転機、激動期をくぐっているようなものだ。大変な環境の変化である。彼は他の利用者と同様、鳴り物入りでやってきた。

「定期的に食事をつけつけなくなるらしい」

「鴨川では、お昼ご飯、ほとんど食べてないって」

「お家で、食べられる時にがんがん食べるらしい」

「度々、入院するんだって。点滴でしのぐそうだ」

「それにしても、あの体重と体形は解せないなあ」

そんな会話が私たち職員の間で飛び交った。実際、長い歳月を在宅でお母上が払ってきた気配り、気苦労は計り知れないだろう。光生園に住まうということは、毎日必ず帰っていた、安心・安全の補給基地である彼のお家とお母上の元に戻らないということだ。「食」という重要な事柄を、少しずつ入ってくる情報を基に、確かめ、確かめ、どうしたら光生園が智さんにと

って安心・安全の補給基地、生活拠点になり得るか、私たちは責任の大きさを改めて痛感し、一抹の不安を抱きつつ、彼との関わりを深めていった。

*

*

最初の二ヵ月、食べたり食べなかったりする不安定な彼の状況に添うことの難しさを感じながらも、まずは彼の好物やペースを理解しようとしていた私たち職員に、程なく試練はやってきた。全く食事を口にしなくなったのである。「拒食」の二文字が駆け巡った。好物であろう揚げ物や牛乳さえ受け付けな。通院点滴を受けながら六日間ほとんど何も口にできなかった彼は、とうとう入院となった。二十四時間丸ごとの生活を支える怖さと頼りなさ、自分たちの力不足と、お母上の苦勞を同時に思った。幸い一週間程で復調の兆しを見せた智さんは光生園に戻ってきた。「内臓の異常は認められません。癲癇発作が関係してるかと思えます。」と、

医者は言った。結局、彼が食べ物を口にしたのは実に半月ぶりのことになった。その後の彼の食事ぶりは順調に思えた。いや、彼はよく食べた。あの半月がうそのように食べた。



「これが長年培ってきた彼のリズムかもね。時々断食する。夏はたぶん体調不良。不振期なんだよ。」
「それで片付けられないよ。自分たちは何一つ満足に彼のことを分てないんだからね。自分たちの手の中に智さんの生命が鼓動していると思ってみてよ。怖いだろう? 何か、こう、焦燥感を覚えるだろう?」



*

*

「この痩せ方は、病的な痩せ方なのか、それとも良好なダイエットの範囲なのか、それが問題だよ。」

「肩や上半身の筋肉が落ちていないか?」

「パワーは無くなったかな。」「BMI指標は?」

「動きが早くなって、この間久しぶりに会ったお母さんが彼についていけないと言っていたな。」

「まったく食べない日は無いよね。でも・・・」

私たち職員は、智さんの「食」に対する危機感がしだいに薄れ、最低ラインで安心している現状に自戒をこめて、ケース会議で議論をしたのだった。

「たしかに智さんの環境適応力には目を見張るものがある。動きも広範囲になって軽やかだ。だからこそスリムになったとも言える。彼の食の問題から自分たちの意識が薄れたのは、拒食が続くことが最近は見られないからだ。でも、体重が減り続けていることは無視できない。BMI指標はまだ高めだが、不可逆的に減っていった、ドーンと大きい発作に見舞われたらどうするのか。」

「智さんが食べない人などという先入観や気分は捨てるべきです。彼の行動全体が彼の言葉です。食堂から出て行くこととする彼は、職員とのやり取りが気に入らなかつたかも知れない。声が出ている時、自分は食べ始めをじらしたりします。彼、食べようって催促するのです。この頃、智さんとのやり取りに手応えを感じています。そんな時は食べてくれるんですよ。」

議論は続いた。私たちはやっと智さんの気持ちに寄り添える地点に立ったことを自覚した。

(丁)





『隣の晴ちゃん』



(一) 「COCOガーデン」

ケアホームCOCOの家の前にはちよつとした広さのお庭がある。皆でここに引っ越してきた時、畑を作ることにした。はじめにジャガイモを植えた。できるかどうか、ちょっぴり不安だったけど、楽しみでもあった。次にトマトとキュウリとナスとパセリを植えた。だいぶ畑らしくなった。「花壇も作って、お庭で近所の人たちとお茶会したいな」

こうして、COCOガーデンを作ることになった。

(二) ハナサカおじさん

淳二さんはハナサカおじさんだ。花壇に植えた数株のマリーゴールドの花がら摘みを朝夕熱心にやっている。誰に言われたわけでもないが、花がらをほぐしては種を植え付けて、水遣りする。耳の聞こえない淳二さんの肩に合図するまで一心不乱に続けている。おかげで、あれよあれよという間にあちこち芽を出して花壇がマリーゴールドのオレンジ色で埋め尽くされてしまった。見事な花壇に変身した。

(三) 隣の晴ちゃん

お隣の晴ちゃんは、三歳の男の子。でも、とても顔



がひろい。湊の町をお母さんと一緒にいつも散歩している。写真屋さん、お肉屋さん、焼き鳥屋さん、スーパード行った先々で、笑顔を振りまいて、色々と頂き物をするらしい。

この間は、ゴミ収集車のお

じさんに花火を買っていた。

そんな晴ちゃんとお知り合

いになったのは、一緒に

COCOガーデンでジャガ

イモを植付けてから。晴ち

ゃんは、ジャガイモ掘りを

楽しみにしてか、COCOガーデンによく遊びに来

るようになった。お花に水遣りをしたり、畑で砂遊

びをしたり、トマトやブルーベリーを摘み食いた

り、COCOガーデンは、晴ちゃんの遊び場の一つ

になった。

(四) 微笑ましい、ゆるやかな時間

ある日のこと、いつものように淳二さんがマリー

ゴールドの管理をしているところに、晴ちゃんが、

お花の水遣りにやって来た。ホースを手に、二二二

コの晴ちゃん。そこへ淳二さんがジョーロを持って

スタスタとやって来る。淳二さん、当たり前のように

晴ちゃんにジョーロを差し出し、水を催促する。

晴ちゃんも極自然にジョーロにホースで水を入れ、

半分くらいで止める。淳二さん半分しか入っていない

水にやや不満そうだが、花壇に戻り、水遣りをす

る。再びホースで水遊びを楽しむ晴ちゃん。またま

た淳二さんが晴ちゃんの元へ来る。晴ちゃん、また



も半分だけジョーロに水を入れ、淳二さん、(また半分か、仕方ないな)という顔で、花壇の水遣りに戻って行った。昼下りのCOCOガーデンに、なんとも微笑ましい時間がゆるやかに過ぎていく。

(五) ジャガイモのおじちゃん達

COCOガーデンに期待していることは、こんなことなのです。ちなみに、晴ちゃんは、COCOのメンバーのことを「ジャガイモのおじちゃん達」と呼んでいる。

「ゴミのことはめっぽう詳しくて「燃えるゴミ用」袋を片手に草取りをするジャガイモのおじちゃん。マリーゴールドだけを可愛がっているジャガイモのおじちゃん。流行のツンツンヘアで洗車が得意、ときどきカメラを首から提げているジャガイモのおじちゃん。歌が上手でおしゃべりしているジャガイモのおじちゃん。ミニカーや機関車が趣味のジャガイモのおじちゃん。いつもにっこりにっこり笑っていて、ゆっくり歩くジャガイモのおじちゃん。初めの頃は、「ジャガイモのお兄さん」と呼んでいたのにね。

あ、そうそう。この頃はね、一人ひとりのおじちゃんたちの名前を晴ちゃんは覚えてくれたんだって。それからね、お友だちのレイちゃんも一緒に来て遊んでいるんだって。



(井上)

光 陽

『夏祭り』

～一年越しの想い～

おじいさんは、一昨年の夏祭りで素敵な歌声を聞かせてくれた歌手、藤野とし恵さんのファンになりました。部屋にはポスターとカレンダーを貼り、夏祭りが終わってから毎日それを眺めては顔をほころばせておりました。

昨年も再会を楽しみにしておりましたが、改修工事の為に夏祭りが中止となり、大変残念がっておりました。

今年は夏祭りが開催されることとなりました。夏祭りのポスターが廊下の掲示板に貼り出されると、おじいさんは真っ先に気が付き、ポスターの前を通る度に、

「来るのか？」

と嬉しそうに話しておりました。



そして夏祭り当日。おじいさんは、室内で、そわそわしながら催し物を見学していました。おじいさんは夏祭り実行委員長より、歌手の方へ花束贈呈をするという大役を仰せつかっていたのでした。

足が不自由なおじいさんは、車椅子に乗っています。歌手が登場すると、普段より力強い走りで会場へ飛び出してきました。歌手がよく見える一番前の席へと陣取り、息を整え自分の出番を静に待っていました。

日もすっかりくれてちょうちんの淡い明かりが会場を包んでいます。

最後の歌が終わり、会場の中央に出て歌手に花束を渡すおじいさん。

握手をして、歌手の方と言葉を交わしました。

「また来いよ！」

と言ってきた、とおじいさんは照れた様子で話してくれました。

おじいさんのこの言葉を聞き、今年の夏祭りの成功を感じました。

今、おじいさんの部屋には、藤野さんと一緒に映った写真が飾られています。どんと晴れ！

(夏祭り実行委員 田中)



『海水浴』くたそがれて鴨川く

今年の夏は、やたら暑くて参っちゃう。学園のバスを待っている間がこれまた暑いんだよ。庭で水浴びしたって、おっつかないよなあ。房州男児にはやっぱ海でしょ！断然海がよく似合う。うん。

海水浴とくれば、女子大生なんだよねえ。え？何の事って？毎年、海水浴に国際武道大学の女子大生が実習がてら参加するんだ。

一緒に海に入るのが楽しいのなんのって。毎年わくわくどきどきしちゃって、僕はシャチになって・・・、いや違った、イルカのように泳いで見せたんだ。注目されたぜ、ふふふふふ。

今年はね、城西国際大学観光学部の学生さんがボランティアで来てくれるって聞いたから、「カンコー」っていう響に僕の耳は虜になってしまって、海的情景がぐるぐる頭の中を行進した。

当日、二人のボランティアは皆と海に入り浮き輪を優しく引っ張ってくれたり、ボディボードのサポートも嬉しい腕でしてくれる。うん？嬉しい腕？海パン？・・・お・とこ・・・だ！ば、僕は何を期待していたんだろう、ああ。

*

*

「あなたねえ、介護実習でも、職場体験でもない。純粋に“ハート”でボランティアに来てくれた学生さん達だ。海パン、嬉しい腕、眩しいくらい格好いいよね。」

「そう思わないかい？」

（うん・・・）

「うーんって、何やってんだよ、おい。」

（だって・・・）

「去年みたいに泳げばいいじゃないか。こんな波打ち際で砂遊びなんかしてないで、なあ、おい。」



（利用者代弁・鈴木）

『夏祭り 思い出の一言』

利用者の皆さんが、とても楽しみにしている夏祭りのお話です。

*

グラウンドに設置される舞台作りも、力持ちの男性利用者に手伝ってもらった甲斐あって順調に進み、祭り当日の午前中には準備万端で、お客の来園を待つばかりとなり、余裕余裕の雰囲気か漂っていると思われたが、実は職員の内裏には一つだけ心配があったのだ。

「天気が・・・予報では雨そうですよ。」

園長、外でやれるでしょうか？」と、職員。

「ここまで準備したんだ。今日は晴れるよ。」

大丈夫」と、園長。

「でも、何だか降ってきそう・・・」と、再び職員。

そつこつしている間に、空からぽつり・・・。

「園長、雨です。」「やむさ、まだだ。」「・・・」でも、御心配なく。その後ばらばらと雨が降りだした時には、室内の会場の準備は素早く整えられていました。

（ここまで準備した職員の努力を無駄にしないために、外でやれる可能性と中の準備のための残り時間を考えていたんだよ。）とは、園長の胸の内の一言。

室内での祭りだから、地域のお客さん達がやって来ると、てんやわんや。それでも会場は大盛り上がり。本日の目玉の歌謡シヨールとなった。

「それでは皆さん！“みなみ連さん”の歌謡シヨールです。」

ステージから降りてきた歌手は、利用者にもお客さんにも体に触れんばかりの至近距離で熱唱、握手されると更に大興奮。その時タイミングよく誰かの一言が聞こえてきた。

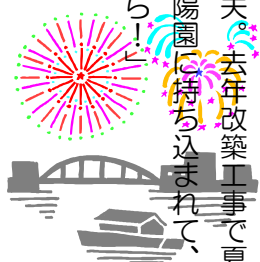
「可愛いし、歌も上手いね。けどそれほど若くはないようだな。」

室内の至近距離と明るい照明の“ハイビジョン効果”は計算外だった。

*

例年のフィナーレを飾る花火は、雨のため出来ず、「なんか、不完全燃焼だなあ。」

「いや、大丈夫。去年改築工事で夏祭りが出来なかった三芳光陽園に持ち込まれて、二年分、夜空を焦すんだから！」



（中川）

ちょっと いっぶく

浜崎カメラマンの

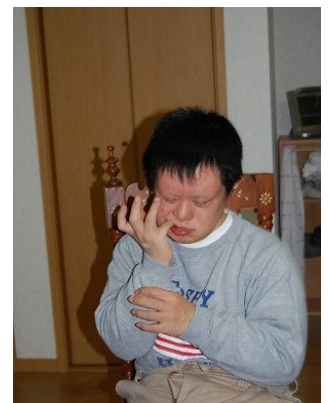
写真展

春



プロフィール

浜崎 伸一。昭和 40 年 1 月生まれ。
袖ヶ浦養護学校卒。卒業後、豊岡光生園
で暮らす。平成 18 年 12 月ケアホーム
COCO 入居。豊岡光生園当時からイン
スタントカメラで写真を撮り始め、次第
に熱が入り、現在一眼レフのデジタルカ
メラを使っている。脳性マヒの不随意運
動の為、カメラの保持やシャッターを押
すことが容易ではないが、彼の狙った被
写体は実に自然に仕上がっている。撮ら
れる側からすると彼の動きと手指の不
随運動故にいつ撮られたのかわからな
いので構えない写真になるらしい。将
来、個展を開きたいという夢を持ってい
る。かなりの熱血漢で正義の味方。大変
なお洒落で毎朝容姿を整えるのに、30
分以上かけている。



編集後記

熱禍と言いたいほどの今
年の夏でした。近頃、天変地
異が多すぎるようです。せめ
て、人の心だけは平穏であ
りたいと祈っています。

『きらめき』第十四号をお送
ります。

(丁)